

子どもと一緒に！ 地域に根差した子ども哲学を —ねりま子どもてつがく（ねこてつ）、3つの試み—

高口陽子 佐々木亜希子 柄尾江美 小川泰治
（ねりま子どもてつがく）

1. 「ねこてつルール」を、こどもと考案



2016年7月10日、ねこてつメンバー+和光の「こてつ」さんを迎えて、「ねこてつのルールづくり+こどもファシリ勉強会」を自

主開催しました。

ルールづくりは、前回騒がしくなってしまった反省から、「どうしたらうるさくならないか」「どうしたら、みんなが楽しく対話できるか」を、こどもたち自身に考えてもらおう！という主旨。なぜなら、誰よりうるさかったのが、メンバーの子ども2名だったから（慣れ&仲良くなったことの反動が……）。自分たちで決めたルールなら自分たちで守るだろう、と期待しての試みです。

「思っていたより簡単だった」←
おおっ！

「話すのとはまたちがうおもしろ
さがあった」←おおおっ!!

なかなか手ごたえがあったよ
う。親子4組(8人)というのも、
ちょうどいい人数でした。何回か
子ども哲学に参加した子には、上
級編?的な回を設けてもいいか
もしれない、と思いました。

また試してみたい!と
思っています。

2. 「親向け解説書」を作成

子どもには子ども向けの、大人
には大人向けの説明が必要……。
これまでの講師の方々からそう
アドバイスを受け、ねこてつ第6
回では、大人と子どもに分かれ、
哲学対話の特徴や魅力を先生か
ら伝えてもらいました。

また、大人向け&子ども向けに、
別々の資料も用意。執筆はメンバ
ーの小川泰治、編集は栃尾江美が
担当しました(参考資料2)。

大人への“満足度”をあげるこ

とが、子どもてつがくへの理解を
深め、また、リピート率をあげる
ことができるのでは……と考え
ています。

3. ママならではのアイデアと 行動力を!

地域に根差したママだからこ
そ、専門家とはまた違うことがで
きるはず……ねりま子どもてつ
がくでは、そんな視点を大切にし
ています。

たとえば、毎年練馬区では「ね
りまこどもまつり」というイベン
トを開催します。これは、例年約
5万人(2会場あわせた人数)と
いう大規模なおまつり。そこで宣
伝をしちゃおう!と、いそいそと、
出展を申し込みました。

残念ながら、雨で参加できな
かったのですが、「てつがくしょ」
「てつがくのき」といったアイテ
ムを作成しました。「てつがくし
ょ」は、問いを書きあげ、世界に
一つだけの哲学書を完成させよ
う!という企画。こどもがスタン

実践の扉

プラリー好きということで、スタンプも手作りしました（メンバー 栃尾・作／参考資料3）。「てがつく のき」は、第5回で活躍。葉っぱの形の紙に問いを書いて貼り、樹木のように仕上げていくのですが、これはメンバーの佐々木亜希子が担当しました。こどもがいるからこそ、湧いてくるアイデアではないでしょうか。

今後もねこてつでは、「こども×親×地域」だからこそできる取り組みを大切に、地域に根差し、活動を続けていきたいです。

最後に、専門家ではない私たちにも、こうした発表の場を与えてくださった哲学プラクティス連絡会の皆様に、感謝を申し上げます。専門家の方々の寛大さとご協力がなければ、地域では広められません。これからも、力と知恵をお借りしながら、地域に子どもてがつくをもっと広めていきたいです！



みんなで、でつがくを たのしむぞ

ねこてつりール!

☆ねこの1☆ ひとつのはなしを、よくきこう!

きくことは、はなすこととおなじくらい、ちよ〜だいじ!
うるさくさわいだら、ほかの子のこえが、きこえないよ〜。

☆ねこの2☆ ちるくちは、いわないでね。

だれかが、かなしいきもちになるはなしは、たのしくないなあ。

☆ねこの3☆ ボールのちたしかたは…

- ①はなしたかすが、すくない子
- ②ちゃんとはなしをきいている子が、ゆうせんだよ。やさしくなげてね!

☆ねこの4☆ ほかの子のジヤマを、しないでね。

じつりかかんがえたいのに、まわりがうるさくて、
かんがえられない子が、いるかもしれないよ。
なかよしのともだちがいて、つい、さわいじゃうときは、
はなれてすわってみよう。

☆ねこの5☆ しせつのルールもまもってください。

- ・ハやのそとにでて、うるさくしない
- ・ドタバタはしりまわらない ・そのほか…

*2017.7.9あやこでいっしょはかんがえて、つくったルールです。これからも、どんどんよくしていきます!

ここは学校じゃないし、
おとなは先生じゃない。
きになることは、じぶんで
みんなにつたえてね。
こどももおとなも、
みんなであいっしょに
「かんがえるばしょ」を
つくっていきこう!



だいのすたのしむポイント

- ★どんなことでも、だいじょうぶ。
どんだんはなそう!
- ★きいているだけでもOK。
たいせつなのは、かんがえること!
- ★しつもん、だいかんげい!
- ★らくにすごそう〜
でも、めいあくには、ならないようにね。
- ★せいかいは、ナイ。
「モヤモヤ」をたのしんじやおう!

「こども哲学」と「ねりま子どもてつがく」のご紹介

文：小川泰治 編集：梶尾江美

「ねりま子どもてつがく（略称：ねこてつ）」にご参加いただき、ありがとうございます。

参加を決めたはいけれど、「どんなことをするの？」「子どもにどんな影響があるの？」と疑問に思っている方も多いのではないのでしょうか？そこで、保護者の方向けに、こども哲学の意味や教育的効果、ねこてつの考え方などをご紹介します。

こども哲学について

こども哲学って、そもそも何？

「こども哲学」とは、子どもたちが輪になって、「ひとは死んだらどうなるの？」「ゲームはなぜおもしろい？」「もみぢは、たくさんいたほうがいい？」などのテーマを決め、自由に意見を出し合う活動。私たちは、こども哲学における「哲学すること」を「子どもと大人と一緒にって身近なところにある問いを見つけ、それを共有し、自分たちの言葉で徹底的に考えること」と捉えています。

はじめりと発展

こども哲学は、1970年代にアメリカでリップマンという大学教員が大学生の論理的思考力の低下を嘆き、小中学生から対話型の哲学教育が必要だと訴えたことに始まります。その後も世界的に注目され続け、ハワイの学校で実施された事例をきっかけに、日本でも注目されるようになりました。そこでは、荒れ気味だった教室のなかに、「安心して過ごすことのできるコミュニティ」が少しずつ形成されていったそうです。

意義、教育的効果

リップマンが始めた当時は、ものごとや価値を鵜呑みにせず自分で考え、判断していく「批判的思考力」が身につくとされてきました。現在はそれだけでなく、何かを生み出していく「創造的な思考」、対話の相手や自分に関心に向け、気遣いながら考えるための「ケア的な思考」も身につくとされています。また、相手の話を聴きながら言いたいことを伝えるコミュニケーション力や表現力も身につくでしょう。

よくある心配

Q.うちの子、黙ったまま何もしゃべらないうけ大丈夫？

A. こども哲学の目標は「子どもたちが活発に話すこと」ではありません。ひとりひとりがじっくりと考えること。だから、黙っていたとしても、考えているのなら心配することはないのです。

Q. 発言の回数は多いけど、思いつきで話しているだけじゃない？

A. 思ったことをすぐ言葉にできるのは長所と考え、大切にしましょう。問いかげの中で、これまでと打って変わってじっくり考え始める子どももいます。焦らず対話を重ね、大人が粘り強く考える姿を見せて子どもが手本になることで、子どもが変わっていく姿も見られます。

Q. 答えが出ない（答えを出さない）ってモヤモヤするんだけど…

A. 実際の社会は、短時間ですぐに答えの出ない問題であふれています。モヤモヤを抱えたまま考え続ける力も必要になることがあるでしょう。答えの出ない「モヤモヤ」を楽しむくらいに気持ちを取り組んでもらいたいと考えています。

親の関わり方 ～ねこてつでは、親も積極的に対話を！～

1. 大人のほうが頭は固い

私たちが大切にしたい「考える力」は「親や教師の期待通りに答えを出す」ことではありません。考えることはもっと自由であるはず。大人がいつのまにかたくさんの前提でがんじがらめになり、子どもを拘束してはいないでしょうか。

だから、ねこてつでは、こどもたちに考える力を身につけてもらうと同時に、大人自身も子どもと一緒に考えてもらいます。その活動を通して、普段はなかなかできない、ゆっくりと自由に考える時間を楽しんでほしいのです。

ねこてつが終わったあとも、ぜひご家庭でゆっくり話しあってみてください。

2. 親も子どもの話、聞けてない？

私たちは、毎日子どもとしっかり接しているつもりでも、意外と話をじっくり聞いていないのではないのでしょうか。

こども哲学で大切にしているのは、普段大人が子どもに接するときにも必要なことです。「しっかりと聞く」「自分の前提を言い直しながら一緒に粘り強く考える」「考えが浮んでくるまで待つ」……。

大人の価値観で見たときに子どもの言動が間違っていると感じて、頭ごなしに否定せず、まずは理由を丁寧に聞いてあげましょう。子育てや教育の正解を決めず、自分自身の当たり前を問い直すことが大切ではないのでしょうか。

3. こども哲学のスピリットが大切

こども哲学には、世界中の実践者や研究者によって蓄積されてきた理論や手法があります。私たちもそこから学び、ねこてつ場を作っています。

しかし、こども哲学にとって大切なのは、決まったやり方ではなく「スピリット」。「期待通りに考えてもらいたい」「育ってほしい」という気持ちを一旦脇に置き、子どもの自由な思考のなかに一緒に身を置こうとする姿勢です。

これからの世界と一緒に生き抜いていくために、子どもを仲間のように捉え、問いを考え合うことで、ご家庭でもこども哲学の場が始まることでしょう。